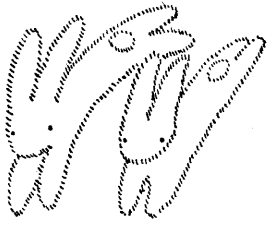


## 出会い（その四）

——シベール——

蕪木寿江



『皆さんは「シベールの日曜日」という映画を知っていますか。シベールというのは木の精で、フランスとかスペインとかラテンの文化の国の伝説なんですよ。あそこにてくる男の人は、フランスとベトナムが戦争していたところに、飛行機乗りで農村を爆撃して記憶喪失症になってフランスに帰るのですが、奥さんはきれいな人ですね、女としてやれるあらゆる誠意をつくしても、あの男の人には駄

目なんです。修道院にいる捨て子の女の子（シベール）と出会ってから変わってくるんですよ。その女の子のいと気持がなごやかにあって、神経の病気が治ってくるわけですよ。

ヨーロッパの人達には非常にそういう気持が強いんですよ。木の精みたいな自然がなくなっちゃうと人間の神経がこわれちゃう。日本はシベールなしでしょう。自然など全然

なくてデパートなんかで飲んだり食ったりばかりして、神経が変になってしまふ筈ですよ。

結局二人はクリスマスの夜、山の中で火を燃している、男の人は警察につかまってシベールも両方とも死んでしまふのですけれども、世間というものは、そういうもんですよね。あの男にとってシベールと出つくわしたことは象徴的にいっているのですが、大自然の精というものに出会ったことよって神経が正常にもどるわけね。この世間的なものに慰められようと、破壊された神経はなおらないんですよね。

ぼくはシベールっていうわけにはいかないけれど、ブッシュ孝子からみれば、ぼくはシベールと共通するものを感じたのでしょいか。大学を定年でやめてなげぼくは畑なんかやっているのかと思つたね。畑の作物の出来

が悪いと僕の神経も具合が悪くなつちゃう。長雨が續くと地面が冷たくなって空気が入らなくなつてしまふ。大地というものは温度をもっている。冬でもあつたかい、母親と非常に似ていますね。ただの土じゃあないんです。うまく肥料が入つていて水も流れている土の中で、根が何と出会っているか、作物の色と健康さでわかる。日本人がこれだけ自然を汚しちゃつた時代はないんですよ。農薬もその原因ですね。昔の農民と違つて市場からお金でせめられれば、いやでもおうでも金目のものをつくつて競争して売らなければならぬ。作物を愛している暇も対話している暇もない。日本人にとって自然は神様ですよ。神様は人間がどんなに利口であるといつても、人間の角でへし曲げられたままにいるわけはない、自然は人間より強いんだ。自然は苦しんでいるに違いない。自然はいつか復



譬するだろう。ぼくが畑をやっているのは、わずかの土地といえども自然をながめたい、自然が人間の欲の下で押しつぶされ穢れたままでいる筈がない。雨が降っても傘をもって眺めています』（五十四年十月の講演会より）

偶然にも「シベールの日曜日」の映画をテレビで見ても共感していた私は、その偶然に驚いた。早寝早起きの習慣で滅多に夜のテレビは見ないのに、シベールの可憐な可愛さに魅かれていったのか、身をのりだして夢中で見ていた。周郷先生のようにこんなに深く考えずにいたが、男の人が盗ってきたクリスマスツリーに灯をともしているとき警官が走ってきて銃声がとどろいた。と、The endの文字が森の中から迫ってきた。シベールは「木の精」であったのかとお話を伺って納得した。先生もシベールであったような気がする。木の写生をなさるのがお好きで、スケッチブック

クにそれぞれ語りかけてくるような木が描かれてある。東京にお住いの時は、小石川の植物園や外苑に行かれたとか。よく出合う散策のおばさんに、「あなたは木の精ですか」と、言われたと聞いたことがある。

#### 木

木は十字架です

地は根ざし

天を求め

重力に逆さかって

伸びあがる

——ぼくは

また

冬枯れの

春を待つ

木を描きたいと

それを求めて

歩きまわる

空にひろがる

雪雲のなかの

太陽は

まぶしくて……

『そのころ——そうして今も——私は、あの木を描いてみたいという一念に駆られてスケッチをして歩いた。もちろん、そうやすやすとは描けない。が、私は冬から春にかけてまだ芽を出さない木たちが枝をのぼしてしまったり、また夕方の風や寒さに耐えているのを見るのが好きだった。そう、木と「同一化」をやって（まさに、シベールではないか）自分の分身のようなそういう木をさがして林の中を歩きまわった。林のなかでなくとも、街のなかでもよかった。石川啄木の「今の世のなかには山の奥の巨木のような人間がいなくな

った」という考え方があったのかも知れない。街のなかでも、天に向って伸び、枝を張った自然のままな巨木のおもかげのある木をみつけて、それをよく仰いでながめた。「みんな何を見ているのかね……が、ぼくのように木ばかり見ている人はいないだろうね」友人と街を歩いて、ふとそんなことをいったものでした。』

山の手入れをしなくなった森を歩いては、葛の太い蔓でぐるぐるまきになって頭を垂れている杉や松の木を、鎌を持って蔓を切って歩かれ、木々が空に向って自然の姿を取り戻すのをほっとして眺められた。夏は木の下草を刈ったり、冬枯れになると麻袋を背負ってみぐるしくなった落葉掻きに、何度も何度もいらっしやるなど、常に先生の心を心として手になり足になっていた奥様と一緒に、又は一人で、手首が痛くて原稿が書けない日もあ

つたが、そうせずにはいられない程、木の生命が大切であった。又、川が汚れているのを

た。んて沢山枝をつつ込むと駄目だよ」と言われ

憂い、澱んでいるごみを、教会の人や訪ねてくる若者の先頭になって取り除き、気持よく

樹の心

流れる川に戻していった。『山をきれいにし

樹の心を思い

ましよう』『自然を愛しましょう』などという

草の心をしのび

スローガンは、あれは山が瀕死の重症だ、と

春来る前の

いつているのと同じなんですよ、人間は自然

冬の林の

と共存していて、当然のことを叫んでいると

風の中に

いうことはどういふことなのでしょう』と、

ひとり佇みたたず

よく話された。林の中で、石でかまどをつく

またさ迷い歩く

り、たき木を集めて飯盒でごはんを炊いた

わが心の不思議さに

り、先生の畑でできたたまねぎのお味噌汁を

ふと涙ぐむ

つくったりして、ガサゴソという落葉の上

いずこにか

で、先生を慕って来た遠くの人達や教え子達

川の流れる音がして

と語りながら食べた。煙にむせんでいると、

春近しと

「火を燃すことも知らないのかね」と言つて

告げ知らせ

教えて下さった。「何でも、早くしよう、な



風未だ寒く

この林に

日のかげり

ただうつくし

樹木のように

私は一人でいたい

人間に会いたくない

山の木のように

聳える山のように

人が来るのを

避けている

私は

人のわざわざいで枯れてゆくのを

おそれている木のように……

木といっしょに

亡びていくのを知っている木なのだろうか

「人間に会いたくない」とおっしゃりながら、最も人間を愛した先生のように思えてならない。

\*ブッシュ孝子

お茶の水女子大学家政学部児童科を卒業後、大学院生として三年間ドイツ留学（自閉症の子どもの治療）。ヨハネスと婚約、日本に帰り、乳ガンの宣告をうけ、先の困難を知りながら結婚。一九七四年一月、二十八歳で逝去す。七三年九月からほとぼしるように詩を書きはじめ、一ヶ月で八十篇を越える。「白い木馬」として先生が編集、サンリオより七四年八月出版

参考資料 周郷博著作集第五卷

(市ヶ尾幼稚園)